

ツインスターレイル

ゲルゲルググ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の主人公憑依ものだと思ったら原作にいない星神がいるし女主人公もいた。何言ってるかわからないと（ry

目次

プロローグ

1

ダブル主人公

14

プロローグ

何かを閉じ込める為に作られた飾り気の無い空間で、二人の女性がいた。

一人は背が高く、しっかりと服の上にコートを羽織り、おでこ辺りにサングラスを乗せ、赤紫の長髪を後ろで結った美しい女性。もう一人は、青と赤紫のゴールをおでこ辺りに乗せ、銀髪を後ろで結った上にロールにした、女性にしては派手な格好をしている少女だ。

女性の掌には煌々と輝く球体が握られていて、少女は空中に投影された画面を操作している。二人とも、何やら良からぬ事をしていた。

「媒体の準備が出来た。でも……」

「どうしたの？」

「エリオは、あなたが此処で多くの変化をもたらす選択をすると言っていた」

「ええ、そうね」

「それを踏まえた上で、これを見て欲しい」

指をヒュッと振るって、少女はホログラムの画面に映っている一人の人物を女性へ見せる。

「…………一人だけね。どうしたの銀狼？ エリオの脚本に逆らいたくなつたのかしら？」
「カフカ、私をからかわないで」

「じゃあコレはどう説明するつもり？」

銀狼と呼ばれた少女は、ガム風船を膨らませながら少しの間思考し……風船を口の中へ戻してから、カフカと呼んだ女性の問いに答える。

「…おそらくエリオは、私が星核万界の箱を入れる媒体を二人用意すると知つた筈」
「でも何故か、貴女は一人だけしか用意しなかつた」

「何故かね。完全に無意識だった。私は真面目に言われた仕事をしただけ。問題なのは私じゃなくて、最初から一人だけでも言いたげにしている媒体の方」

「ふうん……」

「はあ……いいでしょ別に。用意した媒体は、エリオの脚本通りなんだし」

「そうね……まあいいわ、切り替えましょう。それで、どれくらい記憶が残っているの？
彼女」

「少なくともあなたの事は覚えてる」

光と共に何処からともなく生成された少女の背中に手を回し、カフカはもう片方の手に持っていた光る球体……星核を、少女の胸に無理矢理押し込んだ。

「お覚醒めの時間よ」

みんな、輪廻転生って知ってるね？ そうだね、小説とかによくあるジャンルの一つだ。だいたいトラックとかに引かれて、異世界とか……そういうや、二次創作にもよく使われてるよね。

というわけで、俺はその転生者だ。前世の事は断片的にしか知らない。名前も死因も忘れた。だからと言って今の名前を言えるって訳でもないのだが。

そう、即ち記憶喪失という奴である。あるあるだね。覚えている事は中途半端なアニメ知識やその他と、自分が転生者と呼ぶ存在だっただけ。だからまあ、早く自分の事を思い出す為に劇的な変化が欲しいのだけだよ……

俺今、宇宙を漂ってるんだよね。

なんで？（当然の疑問）

いや本当になんてだよ！おかしいだろ?!なんで目が覚めたら宇宙なんだよ?!それに俺の体は何なの?!サイヤ人かなにかなの?!どうして俺は宇宙空間で思考出来てんの?!

マジでなんなんだコレ。かれこれ体感20年くらい（実際には2ヶ月程経ってます）このまま漂ってるけどさ、マジで漂ってるだけ。息が苦しくなったりする事も無いし、景色が変わることもない。眠たくなる事も無いからこの方ずつと眠ってない。つか、宇宙空間に生身は普通凍りつくんじゃないか?ポケモンBWの映画で見たから知ってるよ。

とまあそんな訳で、声も出せないこの広大な宇宙をただ只管漂う、それが俺の転生者ライフです。虚しいな。

あくそろそろ虚しさ極まって死にたくなって来たぞ。お、流れ星みつけ。お祈りしておこう。次転生するなら地上の生き物に………ん?なんかあの流れ星こっち来てね?来てるね?あこれ来てるわ。今回の死因は流れ星にぶつかるって言う割りと珍しい死に方するのか俺。まあこの虚しいのが終わるならそれでも………あでも流星にちよつと

「……………知らない天井だ」

あ、喋れた。すっげー虎杖悠仁みたいな声してる。初めて聞いたよ俺の声。

つかここ何処だ？もしかして死ねたか？まああんな光り輝く流れ星とごっつんこしたんだ。死んでなきや可笑しいだろ、笑うぞ。後本当に死んだなら宇宙空間に居た時の声はどの道聞いてない事になるよな……………ママエアロ。

「あ、気がついた？」

……………知らない美少女だ。え？美少女？人間？ヒューマン？マジ？

……………（；ω；；）ブワツ

「ええ?!急に泣き出してどうしたの?!量すごっ?!あくえつと…姫子ー!ヨウおじちゃん!」

チクシヨウ…男な上に年甲斐も無く泣いてしまった。余りに恥ずかしい。でも仕方ねえじゃん。かれこれ20年くらい(だいたい2ヶ月程です)一人ぼっちだったんだも

ん。そりゃ泣くわ。

まあ一旦落ち着こう落ち着いた。まずはそれとなく、新しく転生した場所について聞かなければ。あと鏡とか無いか？自分の姿を確認しておきたい。

つてな事を考えてたら、赤い長髪のないすばでいな女性と、眼鏡を掛けた整った顔の青年が扉を開けて入って来た。早いな？!

「大丈夫？気分はどうかしら？」

「ゆっくりでいい。何か違和感があれば教えてくれ」

違和感……いや、そういうのは特に無い。強いて言えば、俺は自分の事を何一つ知らないという事だろうか。

待てよ、この記憶喪失じみた事を使えば、俺が転生した世界についてとかわかるんじゃないか？そうと決まればだ。頭の中でセリフを練習して……ヨシ！

「お二人は付き合ってるんですか？」

「どうやらまだ混乱してるみたいね」

「その様だな」

待って、待って違う待って。セリフ選択ミスったからちよつと待って。

あの後、取り敢えず体が普通に動かせたので、姫子さんとヨウおじちゃん：もといヴェルトさんと列車のラウンジに移動。話をしてわかった事は、先ず俺は死んでなんかいなかった事。今俺がいる場所と、あの流れ星の正体は星穹列車と呼ばれる乗り物だったという事だ。

というわけで、二人が話をしてくると奥の車両に向かったので、此処で適当に暇を潰している。つかラウンジとかあるのスゲエなこの列車。

「全く！オレがオマエに気づいて列車を止めてなければ、今頃タダではすまんかったんじゃないぞー！」

可愛いなこの黒米団子

「ごめんな、えつと……ハムさん」

「パムじゃー！」

「所で可愛いな。ぎゅってしていい？」

「な、なんじゃオマエエ?! ええい止める！オレに近づくない！」

ああ、逃げられてしまった。

「早速仲良くなってるね！元氣そうでなにより！」

「ああ、君は確か……」

「自己紹介がまだだったね。ウチは三月なのか！よろしくね！」

「よろしく。俺は……」

………：「そういう誰やねん俺。転生してから自分の名前なんて知らなかったし知ることも出来なかったな。どうしよ。」

「…もしかしてアンタ、自分の名前が分からないの？」

お、おお………：「なんか理解早いなこの娘。」

「まあ………そんな感じだ」

「うんうん……わかるよ。この列車に初めて乗った時のウチも同じ感じだったもん」

「へ………え？」

「実はウチもね、宇宙を漂ってたんだ。まあアンタと違って、ウチは六相氷っていうおっきな氷の中にいたらしいんだけど」

この娘も割と頭の可笑しい過去をお持ちであった。でも氷漬けにされてるだけまだ現実的だな。いや現実的か？氷漬けにされた人間は普通死んでね？つか六相氷って何いやまあ別に知らなくてもいいんだけど。

あつそうだ（唐突）知らないといえば……

「えつと、三月さん……？」

「ウチの事はなのかでいいよ」

「お、おう……」

「それで、どうしたの？」

なんか距離近くね？あーいけませんいけません、勘違いしてしまいます！

「いやあ、ちよつと鏡とかどつかに無いかな…なんて」

「鏡？うーん、ラウンジには……あ、そうだ！」

おもむろに懐をゴソゴソして……カメラ？可愛らしいデザインだな。

「ハイ！チーズ！」

「え？」

なんか困惑している内に撮られたぞ。

「はい、コレがアンタだよ」

「あ、そういう……」

まあそういう使い方もあるっちゃあるよね。俺は無いけど。

それはさておき、俺のご尊顔を拝見するとしよう。お、中々にイケメンだ。流石転生者と言ったところ。男にしてはちよつと長めな銀髪に、キリツとした黄色い瞳……パーフェクトだ、ウォルター。

……にしても、なんか顔可笑しいな？撮られる時の俺、ちよつと間抜けな面だったと思っただが。なんでこんな証明写真取るときの様な真顔の笑顔——

『よお、乗れたみたいだな』

「ツ?!」

「うえっ?!ちよつとなに?いきなりどうしたの?」

背筋に悪寒が走り、俺は思わず三月の手を弾きながら勢いよく後退つて、ソファに着地してしまふ。

それより今のは……画像が笑つた……?宇宙に漂うとか六相氷だとか、そういうのを聞いた時点で、そういうファンタジーな世界だとは思っていた。だから写真が動くのは驚きはしたが……この恐怖心は別だ。さっきの悪寒はいつたいなんだ?!

「どうした、三月」

「丹恒!あのね、彼の顔を写真で撮つて見せたんだけど、そこから様子が可笑しくなつて……」

丹恒……三月、なのか……?そうだ、俺はどっかでこの人達の事を——

ズキン

「ツツア、ツツア?!?!」

「ええ?!ちよつとちよつと?!」

「ツ!」

頭がツ、痛え!!なんだ、コレツ……!視界も……駄目だコレツは——死ぬ!!!!!!

口説き落として強行突破だ。

ダブル主人公

前回のあらすじイ！崩壊スターレイルの世界に来たと思ったら俺が主人公だったし
変な奴もいた！

以上！じゃ、俺ヴェルトさんとの説得に戻るから！

「行かせて下さい！」

「駄目だ」

「行かせて下さい！」

「駄目だ」

「行かせて下さい！」

「何度言ったらわかるんだ…」

「プリン上げます！」

「物で釣るな…今どこから出したんだそのプリン？」

ホントだ、どっから出したんだろこのプリン。

「やっぱプリンじゃ駄目か？」

「プリンじゃなくても駄目だな」

「そうか、じゃあ……行つてきまアアす！」

「待て」

「どオあツ?!」

なんだこの黒い帯?! ああ、戦闘スキルか! (超速理解)

隙を見て乗り場へと続く扉へダッシュするが、一瞬にして重力の黒い帯に胴体を捕らえられ、続けて右手、左手、両足とその場に変なポーズで拘束される。

此処になのが居なくてよかった! 多分今凄く間抜けなポーズしてる俺!

「はあ……すまないな、パム」

「大丈夫じゃ。列車を傷つけ無ければなにも問題はないわ」

「パムッ頼む……助けてくれエ……」

「そんな顔されてもオレは助けんぞ」

チクシヨウこの黒米団子め!

(さてどうしたものか。いつそ彼の中にある物を教えて見るべきか……言動から推察するに、彼の性格はそれ程難儀なものではないと思うが——)

「ぬおおおおお!!!」

「っ!」

こんな重力の帯如きにイイ!!!俺の転生者魂とオオオ!!!ベクター穹の開拓者魂

がアアアア!!!止められる訳ねえだろうがアアアア
!!!
「よせ!それ以上無理をすれば体が——」

「引き千切れるのは、お前の方だアアアッ!!!」

よオし!帯は引き千切った!筋肉でなんとかなるもんだな!(筋肉だけじゃどうにも
ならねえです)

絶対にどうにもならない筈だとか言われた気がするがどうでもいい。俺は絶句する
パムとなんだか怖い顔になって眼鏡チャキするヴェルトさんに背を向けて、一目散に走
り出す。

「逃がさん!」

また帯だ!まあた虚空断界だ!だがよ、一度喰らった技は……

「喰らいたくないんでねッ!」

「なんじゃあの動き?!」

「……………」

体を狙って来た帯をスライディングで避け、足を狙った帯をスライディングの態勢からの無理矢理ジャンプで躲し、片腕を狙って来た帯を体を丸めるコトで回避して、もう片方を狙う帯が来る前に、体を全力で伸ばして掌を地につけ、そのまま手の力で跳躍することで回避する。

「悪いなヴェルトさん！でも安心してくれ！絶対に帰って来っから！」

では宇宙ステーションに…レディ、ゴー！

「姫子…もしかしたら、俺達は想像する以上に大きなモノを拾ったのかもしれないぞ」

近未来的構造の廊下！逃げ惑う人々！人々を襲う反物質レギオン！タイプはヴォイドレンジャー・略奪とお見受けする！そして人々を掻き分けて勇敢にもレギオンへ挑もうとする俺！

今俺、最高に主人公をしているぞ！

「へっ！序盤に出てくるせいで設定負けしてる奴に負ける気はねえなア！」

「■■■■■■■■■■」

腕から生えた刃を振るう反物質レギオン。だが俺はその刃をすかさず回避し、廊下の壁を蹴ってレギオンの背後を取る。

つかさつきからすっげえな！俺ってこんな動き出来たんだ！

「喰らい、やがれエ!!!」

少し拳を溜め、反物質レギオンが振り返る瞬間にその顔面へ拳を打ち付ける。

打撃との誤差0.000001秒以内に反物質と虚数エネルギーが衝突した瞬間、空間は歪み！エネルギーは黒く光る！

「黒、閃！」

………尚、ベクター穹に虚数エネルギーなんてあるわけ無い。それに放出の仕方とか知らねえだろお前いい加減にしろ。

「■■■■■■■■■■!!!」

「ウワツハツハツハア?!?!?」

反物質レギオンの横薙ぎをバク転で回避し、俺は一目散に逃げ出した。

チクショー！こんなの主人公っぽくねえ！……ん？あれは逃げ遅れた研究者？3か?!
なんでこんな所でウロウロしてんだ！

「ぎゃー！あのバカ、レギオンを連れてくるぞ?!」

「巫山戯るな！巫山戯るな！バカヤロー！」

『こつちに来るんじやあねえ!』

「うるせー！相手を殺れねえんだから仕方ねえだろ！文句あるならバットよこせバット
！」

崩壊シリーズのメイン武器！アレがありや鬼に金棒！ルールだつてブツ壊せる！

「反物質レギオンに近接戦とか死にたいのかお前?!」

「しかもバットつてなんだよ頭イカれてんのか?!」

「すつごいマジレス返ってきてビックリなんだけど?!」

ああクソ！このまま逃げ続けてもジリ貧だ。いつか追いつかれるだろ絶対。行き止まりにブチ当たるとか、他の反物質レギオンにカチ合うとか、そういう展開が必ず来る。クツソ！何かいい方法はねえかな?!

『秘蔵の拳銃ならあるぞ』

「いやバットがいい」

「なんでそんなバットにこだわんの?!野球少年なの?!」

「球技は嫌いだよ!!」

「お前本当になんなんだよ?!」

チクシヨウ、折角の開拓者なのに序盤でバット以外を持つなんて……

『因みに2丁拳銃だゾ☆』

「仕方ねえ！今回だけだ！」

カツコよさには勝てなかった。それでいいのか。

「良いに決まってる！……つか、この拳銃の装飾凄いな？」

『うん、見た目だけは天火聖裁だからな』

「ああ！天火聖裁か！……てんかせいさい？」

待てよ？それって崩壊3rdの……ん？

「おい待てお前まさ——って3人とも逃げるの速っ?!」

あの拳銃を渡した黒い服の科学者……顔をよく見ておくんだったよ永なんとかのバ
ルダム！つかお前星神だろうが！なんでこんな所にいんの?!

『■■■■!!!』

「ツ今はこっちだ！」

2丁の見た目だけ天火聖裁を反物質レギオンへ向けて、先ずは動きを止める為の牽制
攻撃を放つ！

え、あ、倒しちやつた。見た目だけ天火聖裁つつよ。

さて、見た目だけ天火聖裁でレギオンをバツタバツタと薙ぎ倒せる様になった俺は、まだ見ぬバツトを求めて宇宙ステーション内を……って違うわ！俺が此処に来たのはそんなバツト探しの為じゃねえ！

此処に来たかった理由は1つ。俺と言う主人公が既に列車にいるのなら、宇宙ステーションに星核ハンターは現れるのか否か。だってアイツらの目的は、主人公の体に星核とかいう厄ネタをブチ込む事だ。だが主人公たる俺は列車にいた。なら本来、この宇宙ステーションはどう考えても襲撃されない筈だ。

だが現に、此処は襲撃された。ならば考えうる事は1つ！

そう、もう一人主人公がいるって事だな！そしてそいつは恐らく女主人公だと相場が決まっている！なら会わなきゃなア！

というわけで女主人公の元へ向かっている訳だが……収容部分って何処だったっけ

な。

「あー!」

「い?」

何やら驚いた声に振り返って見れば……あら、なーのかちゃん。あと丹恒じゃあないか。

「あんたなんで此処にいるの?!

「ふっふっふ……!」

「いや笑ってないでなんとか言つてよ……」

「逃げる!」

「なんでえ?!」

「追うぞ三月」

「ちよ、ちよつと待つてよー!」

「そつちは通路が出て無いから先に進めない筈……」

「ドリヤア!」

「壁を走つて凄い距離飛んでるー?!」

「俺達も行くぞ」

「無茶だよ丹恒?!」

「今度こそ行き止まりに……」

「ウリヤア!」

「壁をよじ登ってるー?!」

「登るぞ三月」

「ええ?! 私達も登るの?!」

「悠長に回り道をすれば、簡単に撒かれてしまいそうだからな」

「そんなー!」

「ハアア、ハアア、こ……今度こそ……この先の扉は開かなー」

「扉は破る為にある!!!」

「な、なんで……!!」

「だがどの道行き止まりだ。取り押さえるぞ」

「ま……待つ、て……休ませてよ……」

「確保!」

「いだだだだだだ打打打打打打打打打!!!」

「扱いが逃げ出した動物みたいなんだけど……」

くっ、遂に捕まってしまった！煮るなり焼くなり好きにしろ！だけど今星穹列車に連れて帰るのは勘弁な！

「質問に答えてもらおう。ヴェルトさんはどうしたんだ？」

「あの人なら、今頃列車の中で新聞でも読みながらお前達の帰いだだだだだだだ打打打打打打打!!! ホントだつて！俺誰も傷つけて無いから!！」

なんでそんな信じてなさそうな顔をするんだらうねえ?! まあされても仕方ないブームしたんですけどね初見さん！

「丹恒、ヨウおじちゃんは本当に無事みたい。まあ……凄く怒ってそうだったけど」

少し引き攣った様な笑顔でヒラヒラとスマホの画面を見せるなのかちゃん。

やっべーどうしよう。必ず列車に戻るって言っちゃったよ言わなきゃよかった……いや、今なら変な奴の捨て台詞的な捉え方してくれてる可能性が微レ存……

「なら次の質問だ。お前が列車の外に出た理由は？」

「……決まってる。会いたい人がいるんだ」

丹恒の質問に答えながら、俺はこの部屋……丹恒に捕まった時に気づいた、いつの間にか辿り着いていた収容部分。その奥の部屋に視線を向ける。

「会いたい人……?こんな所に?」

「ああ。兎も角、ちよつと自由にさせてくれない?もう逃げないからさ」

「……………」

「…離してあげていいんじゃない?」

「三月…はあ、下手な真似は無意味だぞ」

「しないって」

自由になった体を起こし、肩や首を軽く回す。凄く、キツかったです。やっぱり丹恒先生には敵わなかったよ。

俺はリラックスを終えると、ゆっくりと奥の部屋へと歩き始める。二人も俺の後ろをゆっくりとついてきている。丹恒は俺が逃げ出そうとするのに備えてるんだろうな。いや逃げないけども。

そして、大きな入口を潜って右に向けば……………予想通りの彼女がいた。「本当に人居た?!」

俺と同じ様な服を着て、俺と同じ銀色の長髪が特徴の可愛らしい女の子。その瞼は閉じられているが、きっと俺と同じ金色の瞳をしているのだろう。

ああ、漸く――

「会えたな」

二人の主人公だ。

「今の見た？」

「ええ、見えたわ。それにコレも…通りでアドリブが多い訳ね」

「ホントそれ…：エリオは今、どんな顔してると思う？」

「さあ？ただ、きつと私達が見たことない顔をしてるかもしれないわね」

「どうせ私達の前じゃしないだろうけど」

星核ハンターの二人は、愉快な三人組が走っていった廊下が見える場所に佇み、床に撒き散らされた灰を踏みつける。

「エリオのアンチは一体、何処で私達の行動を知っているのかな？」

「さあ？コレに聞いてみたかったけれど、死んじゃったもの」

カフカは目線で床に撒き散らされた灰と、灰の中心に投げ出された…見た目だけな上に炎属性ではないパチモン天火聖裁を彼にあげた科学者の服を指す。

「エリオの脚本に度々現れて、アドリブで過程だけを滅茶苦茶にしていく。コレは昔からずつとそういう性質を持っている。必然的にアドリブも多くなる。最近では介入がなかったから少し慌てちゃったわ」

「ホント、勘弁して欲しい。というか、何処にでも出てくるね」

「永久の使令は」